

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：33918

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K17507

研究課題名（和文）虐待予防支援につながらない親の「育てにくさ」の認識と行動化との関連について

研究課題名（英文）Supports for mothers with preschooler's behavioral problems by specialists

研究代表者

古澤 亜矢子（Furuzawa, Ayako）

日本福祉大学・看護学部・准教授

研究者番号：20341977

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：児童虐待予防に向けて、養育者が「育てにくさ」を感じながらも孤立してしまう養育者、既存の専門家支援機関等からのアドバイスが功を奏しない養育者の特性を明らかにするため、就学前の子の悩み（育てにくさ）を持ち専門家に相談した母親（226人）と専門家に相談しなかった母親（242人）について、子どもの行動問題（ECBI）、親のストレス（PSI-SF）、母親の属性との関係から特徴を示した。専門家に相談した母親としなかった母親では、居住地域の人口、世帯収入、母親の仕事時間、学歴に大きな差があった。よって、地域ごとの支援は重要である。また、ECBIが、臨床域の子どもの母親は、親のストレスが高い傾向であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

就学前児のECBI得点が臨床域で高いものの専門家に相談しなかった母親は、家族にはよく相談をしているが、ストレスは高い傾向であった。専門家への相談の有無については、地域差、世帯収入、仕事の有無に影響を受けていた。母親のストレス軽減のためには、より良い家族のサポートは必要であるがそれだけではストレスは軽減できない可能性もあり、やはり、専門家によるサポートを早期に受けることが重要であった。また、専門家に相談しようとする母親の援助要請行動の背景には、地域差があることが示され、今後の支援体制に向けての重要な仮説を提示できた。

研究成果の概要（英文）：This study was carried out first to identify different attributes of mothers who consulted specialists and did not. It then investigated the characteristics of mothers who consulted specialists but felt unsatisfied with the given advice, and thirdly, looked into mothers who did not consult specialists despite of their child's behavioral problems were in the clinical range.

This study broadly identified whether there were differences between mothers who consulted a specialist or not, identified the characteristics of mothers who consulted specialists but felt dissatisfied, mothers who did not consult specialists despite high levels of child behavioral problems. There were significant differences in population of residential area, family income, mother's job time, education between mothers who consulted a specialist and those who did not. This suggested there were to provide area by area-based supports.

研究分野：養育期における親子、家族支援

キーワード：児童虐待予防 子どもの行動問題 親のストレス 養育期の親子支援

### 1. 研究開始当初の背景

少子化、児童虐待等で子どもの数が激減している日本の現状の中、少子化社会対策基本法、児童虐待防止法が制定された。内閣府、厚生労働省は子育てへの支援、次世代の社会を担う子どもを社会で支援する取り組みを実施している。しかし、このような施策や専門家の支援を必要としながらも支援に繋がらない親に対してはどのようにアプローチが必要なのかが研究の問である。特に就学前の子は、自身の成長発達だけでなく、社会化の大きな課題に取り組む時期である。子の問題行動に対しての母親の子の悩み(育てにくさ)の認識と援助要請する行動化は重要であると考え。そこで、就学前の子の悩み(育てにくさ)の親の認識と専門機関に相談した(援助要請する)/しなかった母親の特性に注目することで、母親の特性に合わせた支援が可能となることに着目した。

### 2. 研究の目的

就学前の子の悩み(育てにくさ)をもち行政等の専門機関に相談した母親と相談しなかった母親の特性を示す。

### 3. 研究の方法

(1)研究デザイン：記述統計。

(2)研究対象者：就学前の子をもつ母親で専門機関に相談した母親(226人)と専門機関に相談しなかった母親(242人)である。

(3)サンプリング：オンラインによる調査。

(4)変数：母親の属性(居住地、世帯収入、就労状況、母親の健康状態)、子育てによる親のストレス(PSI-SF)、子どもの行動問題(ECBI)

### 4. 研究成果

(1)母親の属性から

本調査での就学前の子をもつ母親群(専門機関に相談した母親/専門機関に相談しなかった母親)の特性として、母親の年齢は差がなく、全体の平均は、35.25歳(SD 4.87)、範囲は22歳~49歳であった。結婚については、両群とも90%以上が既婚者であった。専門家に相談したが、不満足だった母(33名)は、満足した母(122名)、どちらでもない母(71名)と比較して仕事は常勤で、高学歴で有意な差が見られた(P value >.05)。専門機関に相談しない母親は、都市部以外の地域が多かったが、有意差は見られなかった。世帯収入400万以上( $\chi^2=6.4439$ ,  $P<.05$ )、最終学歴大学以上( $\chi^2=0.01748$ ,  $P<.05$ )では、統計的に差があり専門機関に相談する母親が多かった。

(2)子どもの行動問題スコアの臨床的範囲

Colvinら(1999)は、ECBIの強度スコア132、問題スコア15をカットオフ値としている。Colvinの方法に従い、日本の場合のカットオフ値は、強度スコア124、問題スコア13であった。今回の調査では、カットオフ強度スコア124、問題点スコア13とした。

専門機関に相談した母親は、臨床範囲(ECBI  $\geq 124$ )の77例であった。子育てストレスについては、専門機関に相談した臨床域の子どもをもつ母親が、相談したが臨床域の子どもではなかった母親に比べ育児ストレスは、高かった。専門機関に相談しなかったが臨床域の子どもを持つ母親も育児ストレスは高かった。専門機関に相談した母親と相談しなかった母親を比較すると、両者とも子どもの行動問題が、臨床域である場合の育児ストレスは高く、40%の母親が精神衛生上の問題を訴えた。

(3)子どもの行動問題の質問項目から(n=468)

子どもの行動が、母親にとって問題と認識されるのかについての質問では、「食事のときにぐずぐずして時間がかかる(61.3%)」「食事のときにぎょうぎがよくない(62.2%)」、「出された食事を食べようとしない(52.8%)」について、特に食事に関する子どもの行動は、母親にとって問題として認識されていた(図1)。

(4)育児ストレスの質問項目(n=468)

育児ストレス値における群比較では、専門機関に相談し、子の行動問題スコアが臨床域である母親が最も育児ストレスが高く、続いて、専門機関に相談したものの満足を得ることができなかった群、相談しなかったが子の行動問題スコアが臨床域の母親群であった。しかしながら、今回は、統計上の有意差はみられなかった。

また、育児ストレスで、母親が高得点を選択した質問項目は共通であった。「私の子どもは、元気すぎて私が疲れる(78.8%)」で、全体平均の68.1%と比較して高い。やはり、活発な子どもは、母親にとって育てにくさの要因になる可能性も示された。

#### (5)まとめ

就学前の子の悩み(育てにくさ)をもつ母親の特性を明らかにした。子育てに困難を抱える母親のうち、子どもの行動問題スコアの得点が高い母親、専門機関に相談しても満足できないと感じている母親、専門機関に相談しないものの子どもの行動問題スコアの得点が高い母親は、育児ストレスが強いことが明らかになった。特徴的だったのは、専門機関に相談したが満足できなかった臨床域の子どもをもつ母親は、心身の不調を訴えている傾向であった。

行動上の問題が、臨床域である子の母親が、専門機関に相談する/しないの違いには、家族に相談していることが見られ、常勤である母親や世帯収入が低い母親は、専門機関に相談する傾向が低い可能性が示された。

今回は、サンプリング上の限界があり、就学前の子の悩み(育てにくさ)をもち専門機関に相談した母親と相談しなかった母親の特徴を明確に示すことができなかった。子どもの問題行動が高いほど、やはり、母親のストレスが高いことが示されたが、専門機関に相談するかどうかは、母親の環境が影響していることが示された。必ずしも専門機関に相談する必要がなく、周囲のサポートで子の悩みは解決されるものの、依然として育児ストレスが高い場合があるため、母親が、早くストレスを低減するためにも専門機関の利用を検討できると良いと考えられる。また、専門機関に相談したものの不満足であった母親群には、心身の不調を訴えていたため、専門機関の相談の満足度には、母親の心身の健康が影響している場合があることが推測された。

しかしながら、今回の調査において、コロナウイルス感染拡大の時期と重なり、母親の訴えを実際に確認するためのインタビューができなかった。また、データ収集においても限界が見られた。よって、再度、サンプリングの検討、インタビュー調査を次の研究で実施していきたいと考える。

#### 引用文献

Colvin, A., Eyberg, S. M., & Adams, C. D. (1999). Standardization of the Eyberg Child Behavior Inventory with chronically ill children. Unpublished manuscript.

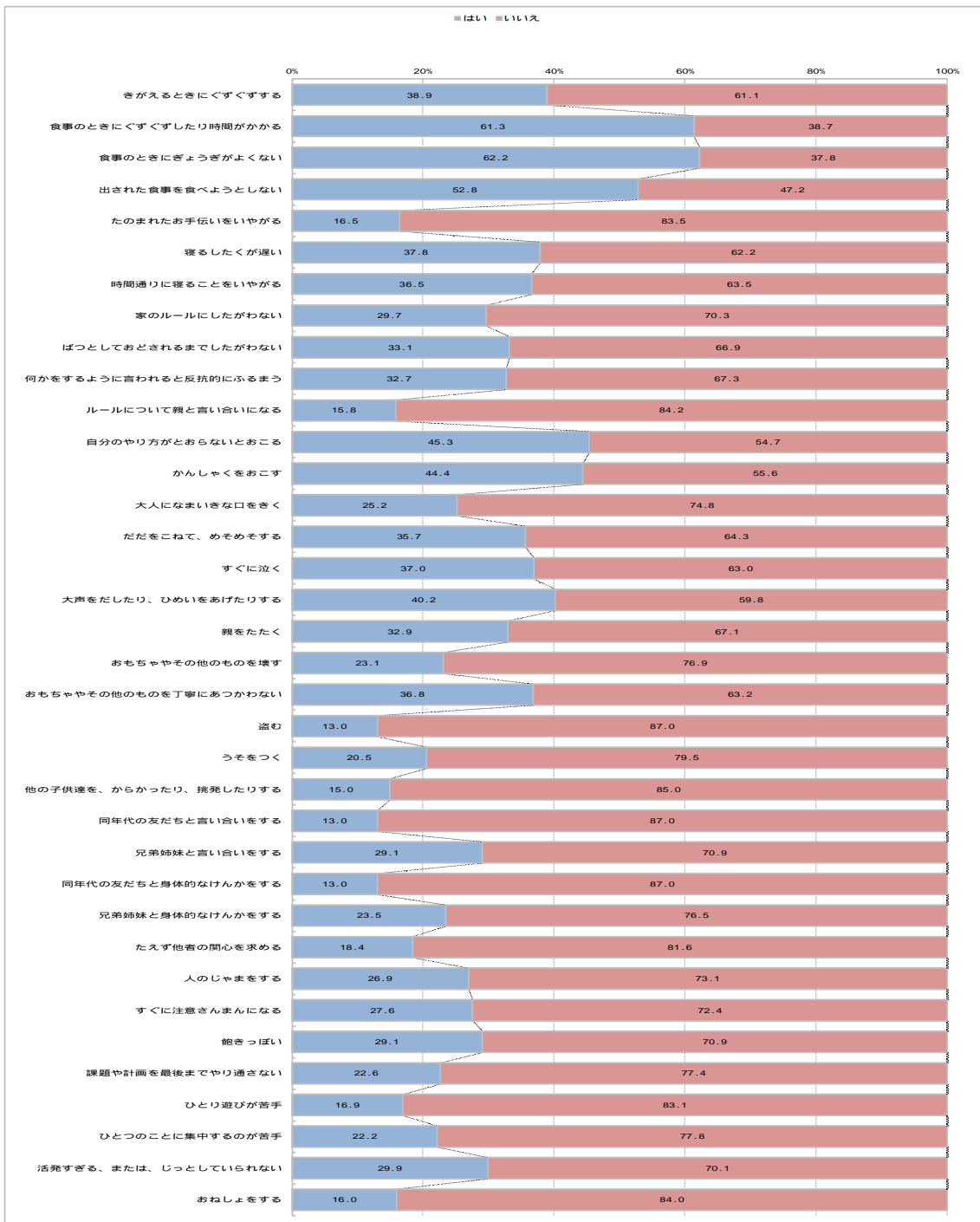


図1 子どもの行動問題(ECBI)に対する母親の認識

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Furuzawa Ayako, Yoshinaga Naoki, Hattori Kie	4. 巻 19
2. 論文標題 Parent-Child Interaction Therapy for Japanese Working Mother and Child With Behavioral Problems: A Single Case Study	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Clinical Case Studies	6. 最初と最後の頁 270～281
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/1534650120926705	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古澤亜矢子、大橋幸美、大村知子、浅野みどり	4. 巻 31
2. 論文標題 スペシャルニーズのある子どもと暮らす 養育期の家族全体のウェルビーイング	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 乳幼児医学・心理学研究	6. 最初と最後の頁 131-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 古澤亜矢子、服部希恵
2. 発表標題 WEB(インターネット)を用いた親子支援、家族支援の試みについてI-Parent Child Interaction Therapy (I-PCIT)、Internet-Child Adult Relationship Enhancement (I-CARE) With Family
3. 学会等名 日本家族看護学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Miyoko Nagae, Kie Hattori, Kumiko Shirai, Furuzawa Ayako
2. 発表標題 Difficulties Associated with Parent-Child Therapy for School Children Referred by the City Education Board in Japan: A Case Study
3. 学会等名 2019年度 PCIT国際学会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 古澤亜矢子
2. 発表標題 「育てにくさ」の親の認識と専門家への援助要請との関連について
3. 学会等名 第24回 日本看護医療学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大村知子、浅野みどり、大橋幸美、古澤亜矢子等
2. 発表標題 養育期家族の家族機能からみた親性発達・育児ストレスの関係と年齢別にみた育児への気がかりの特徴
3. 学会等名 日本家族看護学会第29回学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大橋幸美、古澤亜矢子、大村知子等
2. 発表標題 多胎児をもつ養育期家族の親性と育児ストレスについて
3. 学会等名 第24回 日本看護医療学会学術集会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------